

国語科経営を振り返って

佐藤 きむ

一 作文

私が教育学部を卒業したのは昭和三十年三月、初めて赴任した学校は弘前市立三省小学校だった。弘前市と言っても町村合併で弘前市になったばかりの旧藤代村で、米とりんごの純農村地帯の小学校である。私はそこで三年生を担当した。

その子供たちの一人が、冬の休みの日のことを作文に書いてくれたことがあった。兄弟三人で遊んだことを書いたもので、最後が、「それからとろずのめにつくりました。」で終わっている。はて、いったいこれは、何のことを書いたのだろうか。初めの「それから」と終わりの「をつくりました」はわかるが、「とろずのめにつめ」というのが難解である。

根掘り葉掘り子供に聞いて、家の入口のことをハトロズVということを私は初めて知った。ハメVはハ前V、ハズメVはハぜんまいVだという。家の前の畑の雪を、渦巻き型に踏み固めて遊んだことを書いたのである。

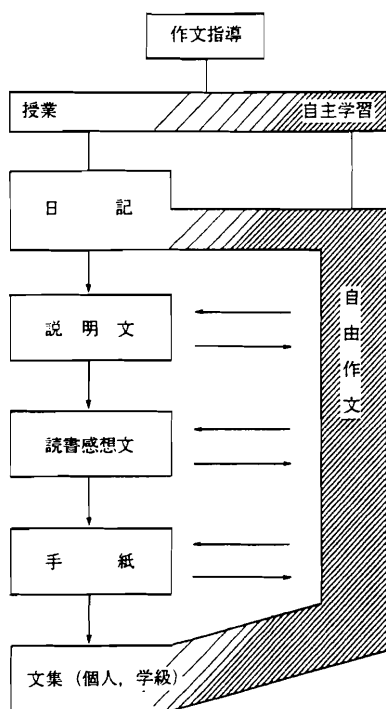
なんとそれは素晴らしい光景ではないか。一面真っ白に降り積もって、全く足跡の付いていない畑の雪の上を、三人の兄弟が大きく円を描きながら一列になって歩いていく様子が目には浮かぶようである。あのころの三省の子供たちは、自分の家の前に大きな「ぜんまい」をいくつも作れるほどの素晴らしい大自然の遊び場を持っていた。その中で得た感動を、「とろろのめにすめをつくりました」としか表現させられなかった自分の指導力の未熟さが、思い出すごとに悔しく恥ずかしい。

私は、子供に国語の力をつけるためには、作文の指導が最も強力な手段であって、国語教師が身につけるべき最も大切な指導法は作文指導であると思っているのだが、その主張の根底には、三省時代のこの「とろろのめにすめをつくりました」のことがあるような気がするのである。

私が作文指導に真剣に取り組んだのは、その後十年を経過してからだった。附属中学校に勤務することになって、当時作文の指導者として全国的にも高名だった渋谷正民先生と同じ部屋で机を並べて暮らすという幸運に恵まれたのである。

渋谷先生の指導法でまず私が学んだのは、国語の授業で毎時間最初に作文を発表させるということだった。生徒の書いた作文を指導者だけが読んでいるのではもったいない。折角書いたものを学級の生徒全員にも聞かせたい。お互いに発表し合うことで仲間のものの考え方もわかって、次第に考える内容も表現の仕方も向上していくし、指導の手間も省けるという、大変効率的な方法であることをまず知ることができた。これは、附中国語科経営の伝統的な一本の柱として絶えることなく続いてきている。

作文発表は、教育実習の期間は休んで、一人年間三回発表の機会がある。私は、この作文発表の記録簿を作って、題名と簡単な評価をその都度記入してきているのだが、時代によって子供の取り上げる題材に変遷が見られておも



しろい。記録簿の周囲の余白には、私のメモが乱雑な文字で書かれてあって、これが子供たちとの交流や、その後の個人指導に役立っている。力のある子供を伸ばす目的で各種のコンクールにも努めて参加してきたが、その指導の土台になっているのがこの記録簿であった。

そんなに作文発表に時間を取っていいのかと疑問を持たれるかも知れないが、それは大丈夫である。「指導要領」では、作文の指導に配当する授業時数について、「第一学年は三十五～五十五単位時間、第二学年及び第三学年は三十～五十単位時間とすること」と定められている。仮に、授業の最初を十分費やして二人ずつ作文発表をしたとして、四十人学級であれば四単位時間で全員発表できるわけで、年間名簿順に三回繰り返しても十二単位時間である。まだまだ作文指導に当てられる時間は十分残っているのである。

ここで、国語科経営の中で、作文指導の体系がどうなっているのかということを説明したい。

この図は、一年生の場合ののだが、左側の文種ごとに□で囲んでいるのは、授業での指導である。右側の自由作文というのは、生徒の自主学习にゆだねられるもので、作文発表もこの中に入る。左側の文種ごとの指導を「輪切り」、右側の「自由作文」を「縦割り」ということにして、こ

の後の説明をしたい。

一年生の場合、“輪切り”の指導は四回行っている。次の表は、一年生の一学期のカリキュラムであるが、○印の付いているのが、作文の“輪切り”の指導にあたる部分である。

7	6	5	4	月
3	22	18	12	時間
△言葉の さまり	小 説	説 明	新し い 出 発	単 元
(文章、段落、文、文節)	魔術(プ) トロッコ(三)	くもの糸(プ) ○読書感想文を書く 植物のにおい(プ) 森林のはたらき(教)	名前の由来(プ) ○説明文を書く 秘密のノート(教)	身構えているもの(教) 辞書に親しむ ○日記を書こう ○身近な生活に素材を求め、大儀がらずに文章を書くこと。
○文章の中の段落の役割や文と文との接続の関係、文節の意味などを考えること。	○文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分の見方や考え方を確かめること。 ○文章の表現に即して主題を考えること。 ○情景や心情の描かれているところを読み味わい、自分の感想を持つこと。 ○自分の考えに基づいて主題がはっきり分かるように表現すること。	○文章の構成や筋道を正確にとらえ、内容の理解に役立てること。 ○文章の要点と事柄をとらえ、要約すること。 ○自分の考えに基づいて要旨がはっきり分かるように表現すること。 ○文章の中の段落の役割や文と文との接続関係などを考えること。	○自主的に学習しようとする意欲をもつこと。 ○語彙に関心を持ち、積極的に辞書を利用する習慣を身につけること。 ○身近な生活に素材を求め、大儀がらずに文章を書くこと。	指 導 内 容

入学して最初の作文の学習は、「日記」の「輪切り」から始まる。作文指導の最も大事な基本は、「大儀がらずに数多く文章を書くように仕向ける」ことである。そのために、題材さがしに苦勞して書く意欲をなくしたりすることのないように、生活日記を書くことから始めるのだが、その日記は、一日の出来事をただ羅列する備忘録的なものではなくて、できるだけその日の出来事で印象に残ったこと一つに題材をしぼり、それについての自分の感想も付け加えるという生活文的なものをねらいとする。

「日記」の「輪切り」の指導の後には、各自の作文ノートにできるだけたくさん作文を書くことを奨励し、書いた作品は、毎時間の授業の初めに名簿順に男女各一名ずつ発表させるほか随時指導者に提出させる。ということ、前に述べた作文発表につながっていくわけである。

二回めの「輪切り」の作文指導は、説明文の單元の中にセットしてある。これは「名前の由来」という説明文の読解学習の後に、「私の名前」という題で説明文的な文章を書く学習である。

その次の小説の單元は、小説の学習の入門單元であると同時に、後で述べる自由読書の入門單元でもある。そして、更に、読書感想文の書き方を指導する「輪切り」の作文指導も含まれている。

「輪切り」と「縦割り」とは、それぞれ別個に並行して行われるものではあるけれども、両者の間で、ごく自然に影響を及ぼし合うのは当然で、二回めの作文発表からは、すでに学習した「説明文」「読書感想文」等も取り入れていくように指導し、また「輪切り」の作文指導の資料として、自由作文の作品を努めて使うように心掛けていく。

本校の一年生と三年生との作文力の差はかなり大きい、それは「輪切り」の指導によることももちろんだが、「縦割り」の作文発表によって、お互いに切磋琢磨された面がきわめて大きいのではないかと思う。

この「輪切り」と「縦割り」とを交差させた作文指導の体系を組織立てて、「自主的態度の育成をめざす国語学習」のテーマのもとでの三冊めの紀要、『集団を活用しての作文指導』という冊子にまとめあげたのが、昭和五十二年春だった。以来、「輪切り」の指導に使用する資料は毎年違った作品であり、指導法も指導者によってさまざまだが、指導の体系は、現在も全く同じである。

二 古典

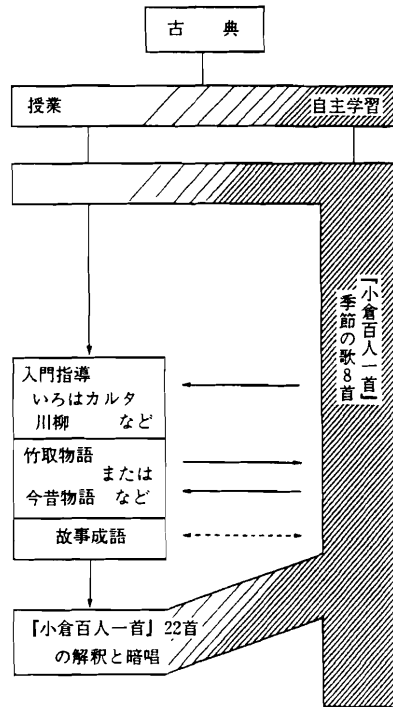
明治の文学ですら、今の中学生にとってはもはや古典の部類に入っていると言っている時代であり、ましてや、明治以前の作品は、言葉の面でも内容の面でも、日常の生活とすっかり懸け離れたものになってしまった。そうした古典文学の中で、唯一現代人の生活の中に入り込んでいるのが『小倉百人一首』だろう。生徒の身近に存在するただ一つの古典とも言える『小倉百人一首』を中心に据えて、古典学習を興味あるものにすることはできないだろうか、それまでも多少授業に取り入れていたのを正式にカリキュラムに組み始めたのは、昭和五十二年だった。

『小倉百人一首』の歌は、「四季の歌」「恋の歌」「雑歌」「羈旅の歌」に分類できるが、「四季の歌」については、月に一首か二首、その季節にふさわしい歌を各学年年間八首を選んで指導することにした。次のは、一年生の場合の計画表である。

四月	61	いにしへの奈良の都の八重さくらけふ九重にほひぬるかな	伊勢大輔
六月	36	夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ	清原深養父
九月	1	秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露に濡れつつ	天智天皇
	79	秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ	左京大夫顕輔
十月	69	あらし吹く三室の山のもみち葉は龍田の川の錦なりけり	能因法師
十一月	70	さびしさに宿を立ち出でてながむればいづこもおなじ秋の夕ぐれ	良暹法師
十二月	28	山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば	源宗于朝臣
二月	15	君がため春の野に出でて若葉摘むわが衣手に雪は降りつつ	光孝天皇

一年生の授業がどうやら軌道に乗りにかかってきた四月末——ちょうど弘前城の桜が咲き始めるころ、「いにしへの奈良の都の八重さくらけふ九重にほひぬるかな」の伊勢大輔の歌で『小倉百人一首』の学習がスタートする。そして、六月には「夏の夜は」を、九月初めには「秋の田の」「秋風に」の二首を、それぞれ季節に合わせて学習して、古典のかなづかいや和歌のリズムに慣れさせたいうえで九月下旬の古典の単元を迎えるわけである。

次頁の図は、一年生の場合の指導体系だが、『小倉百人一首』は、その後もずっと三年間通して、各季節の折々に顔を出し、そしてまた、冬休み前には一つの単元として授業にも季節の歌以外の歌が取り上げられて、学習が継



三 読書生活

「自由作文」「百人一首」に次いで、もう一つの「縦割り」指導は、読書生活における「自由読書」である。国語科における読書生活の指導は、三本立てになっている。

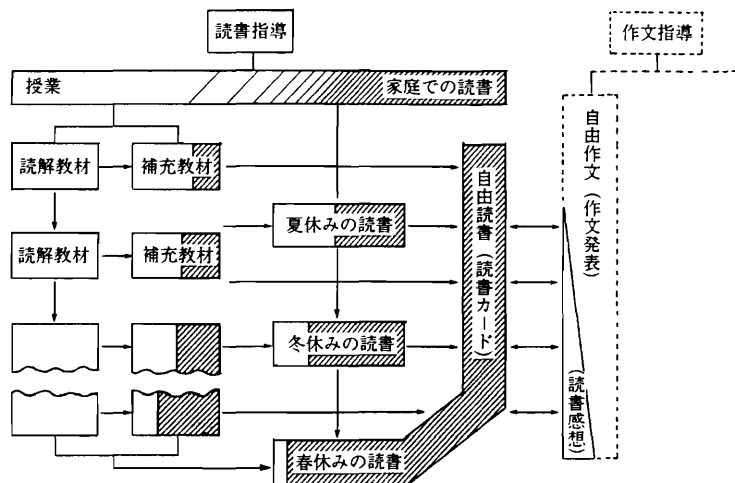
図に従って左から説明すると、まず一般的な「輪切り」の授業での指導である。小説、論説、古典など、読みを主な学習活動とする単元は、精読をねらいとする読解教材と、読みを拡充する補充教材とで構成されており、補充教材の学習から、更にそれに関連した「縦割り」の自由読書へとできるだけ発展させるようにする。例えば、一年

続されていく。教材とする歌は、一年生の場合には、古典のかなづかいの指導に都合のいい歌、朗読のリズムにのりやすい三句切れの歌、表現技巧を凝らしていない比較の意味のわかりやすい歌ということを、二年生の場合には、枕詞・掛詞・序詞などの表現技巧がはつきりしている歌、二句切れがはつきりしている歌ということを選択基準にするなど、その後の古典学習の下敷きとして役立つように配慮して選定している。

生の小説の入門教材は芥川龍之介の「くもの糸」だが、補充教材は同じ芥川の「魔術」か「杜子春」であり、その際、芥川の短編集の文庫本を使用して、その他の作品をも読ませる方向へ指導している。

真ん中は、長期の休みにおける指導系列で、夏休みには提示された課題図書七冊の中から最低一冊を選んで読む、冬休みは指定された短編五編を読むことを義務づけている。各学年とも休暇明けに報告会を開いているが、報告の形式は、ごく一般的な感想文ばかりでなく、「一口感想」「葉書を使った短い手紙文」「読書新聞」「帯紙」など、学年によって変化を持たせている。

残るもう一つの「自由読書」の系列は、「縦割り」の全く個人的な読書である。全員に「読書カード」を持たせ、読んだ本をこれに記入させる。読書も作文同様、「質より量」から出発するのだが、読書カードは、主として一年生が量を競い合うのをねらいとするもので、一枚書き終えるごとに提出させて、「国語科だよりに紹介し、国語科からの小さな賞状もくれることにしている。二年生では、「量」だけでなく「質」の向上ということにも留意して、指導者側からも努めて良書の紹介を心掛ける。また、「推



薦カード」——自分が読んだ本の中で、友達にも薦めたいと思う本について、簡単な紹介と推薦理由を記入するカードを用意しておいて随時書いたものを提出させる。これは、生徒の自発的な行動にだけ任せておくのではなく、いい本を読んでいる生徒を見つけて、カードに書くことを個人的に指導することも大切である。提出されたカードは、直ちに印刷して全員に紹介するのはもちろんである。

この読書生活指導に取り組んだのは昭和五十七年からであるが、「読書カード」や「推薦カード」の記録を見ると、作文の題名同様時の流れの推移が表れていて感慨深い。

四 選択教科としての国語科

一〇三で述べた「作文」の中の「自由作文」、「古典」の中の「百人一首」、「読書生活」の中の「自由読書」、この三つの「縦割り」コースは、全学年、全生徒に共通したものであるが、その他、学年によって、あるいは指導者個人によって実施しているものに、「言葉集め」(季節の言葉、生活の中から拾った言葉等)、「新聞のコラムを読む」といったものもある。

本校の国語科経営の特徴は、教科書を中心とした教材を、年間計画の順序に従って授業を進めていく一般的な「輪切り」の方法に、生徒個人がそれぞれの能力に合わせて学習を継続していく「縦割り」の学習法が加味されていることである。「輪切り」の指導が系統的・意図的であるのに対して、「縦割り」のほうは、生徒の自由学習にゆだねられる部分が多い。生徒が自力で伸びていくのを助けるのに最も適した学習の場が「縦割り」コースであると言えよう。

平成五年度より新しい「指導要領」の下での教育課程が完全実施されることになるが、「指導要領」には選択教

科としての国語科も三年生に示されている。本校では、すでに平成二年度から試行してきているが、まず指導計画を立てるにあたって頭に浮かんだことは、「選択」を国語科経営の中にどう位置づけるかということと、学習内容を生徒たちが自主的に勉強できるものに行いたいということの二点であった。そして、「選択」は、あくまでも国語科経営の一環であって、クラブとは違うのだということを生徒にもはっきりさせたい。それには、一年生からずっと自主学習を続けてきた「縦割り」「コースの延長に「選択」を置くのが最適ではないかと考えたのである。

そこで、三つの「縦割り」に今年度は「新聞のコラム」を加えて四種類のコースを作った。（選択した生徒数は三十六名）

ア 作文 — 普段なかなか書けない長文に挑戦してみる。

イ 読書 — 図書室の本をできるだけたくさん読んで、何らかの形で読んだ証拠を残す。

ウ 百人一首 — 二首組み合わせて、短冊と色紙に書く。百首全部暗唱する。

エ 新聞のコラム — 読んで感想を書く。

終わりに

以上述べてきた国語科経営の仕組みは、縦糸と横糸で織り上げる布地に例えられると思う。着物には染めの着物と織りの着物とがある。染めの着物は先に白生地を織って、その後に染料で模様を染めたもので、色鮮やかな華やかな着物は染めの着物である。織りの着物は、糸のうちに染めて織りながら模様を出していくので地味な感じの物が多く、有名な大島紬などは織りの着物である。あらかじめ模様を想定して縦横きちんと合わせて糸を染めなければ

ばならないわけだから大変な技術を要するし、織る場合も、少しでも糸の張り方がくると全部ずれてしまうことになる。

教科書を中心として学習する“輪切り”の授業を横糸、自主学習を中心とする“縦割り”学習を縦糸として、相互に絡み合いながら進んでいく国語科の学習は、織りの着物の大島紬のようでありたいと私は願う。

振り返ってみると、私の織った紬は、まことに粗末な織物ばかりであった。でも、織り出されてくる模様を楽しみながら、「作文」からスタートして、「古典」「読書生活」と次第に織物の数を増やすことができた。次は、どんな模様にしようかと、毎日々々楽しみながら授業をしているうちに、いつのまにか最後の年になってしまった。

そうした私のやり方に快く同意して、共に同じ道を歩いてきてくださったかつての附中国語科の同僚の皆さんに、そして、今も歩いてくださっている三人の若い仲間の方々に、更に、そうした独自の教科経営をあたたく許してください。くださった学部の方々に深く感謝申し上げます。

(平成四年七月四日、弘前大学国語国文学会での講演要旨)

参考資料

弘前大学教育学部附属中学校国語科紀要

『自主的態度の育成を旨とする国語学習』

―集団を活用しての作文指導―

一九七七年五月発行

『自主的態度の育成を旨とする国語学習』

―「小倉百人一首」を軸とした古典学習―

一九八一年九月発行

『自主的態度の育成を旨とする国語学習』

―読書生活の向上を旨とする国語科経営―

一九八七年五月発行

『自主的態度の育成を旨とする国語学習』

―豊かな言語感覚を身につけさせるために―

一九九一年五月発行